

シーボルト「NIPPON」について

宮崎, 克則
九州大学総合研究博物館

<https://hdl.handle.net/2324/9468>

出版情報：貴重文物講習会. 6, 2008-03-17. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

シーボルトの略年譜

1796年（寛政8年） 1歳

2月17日（1・9）フィリップ・バルタザール・フォン・シーボルト Philipp Baltasar von Siebold は、ヴュルツブルグ大学医学部産科婦人科教授ヨハン・ゲオルグ・クリストフ・シーボルトとその妻アポロニア（旧姓ロッツ）の次男として、ヴュルツブルグに生まれる。

1798年（寛政10年） 2歳

1月17日（12・1）父クリストフが31歳で急逝

1815年（文化12年） 19歳

11月12日（10・12）ヴュルツブルグ大学哲学科に入学、翌年医学部に入籍する。在学中に医学のほか自然諸科学・地理学・民族学を修め、探検旅行にも関心をもつ。

1820年（文政3年） 24歳

9月5日（7・28）医師資格試験に「優秀」の成績で合格。ヴュルツブルグ大学を卒業。

1822年（文政5年） 26歳

6月11日（4・22）オランダ領東インド陸軍外科軍医少佐に任命され、年俸3,600グルデンを給される旨発令される。9月23日（8・9）ロッテルダムで300トンのフリーゲート船デ・ヨンゲ・アドリアーナ号（船長ジャコメッティ）に乗船。同日、ジャワに向かう。

1823年（文政6年） 27歳

2月13日（1・3）デ・ヨンゲ・アドリアーナ号がバタヴィア（Batavia）に到着。オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンより日本在勤を命じられ、長崎出島の商館医員に任ぜらる。〈年俸5,000グルデン 1グルデン約1000円〉 商館長年俸1800グルデン

6月28日（5・20）バタヴィアを出航する。僚船オンデルネーミング号（船長レルツ）と共に日本に向かう。

8月10日（7・5）数人の通詞と御番所衆が来船。流暢なオランダ語を話す通詞に驚く。オランダ人ではないことが露見しそうになるが、辛うじて免れる。長崎口港に入る。

1824年（文政7年） 28歳

3月 長崎奉行の許可を得て、通詞の榎林塾・吉雄塾を借りて診療と医学教育が行われる。

6月頃、日本人の名義を借りて長崎郊外の鳴滝に民家と土地を購入し、学塾と植物園（薬草園）設ける。塾では週1回、診療と医学、自然科学などを教え、日本研究の拠点とし以後4年間存続する。

1825年（文政8年） 29歳

4月19日(3・2) オランダ領東インド政庁より特別予算を受け出島に植物園を建設。以後、1830年日本を退去するまで1,400種以上の植物が栽培される。

1826年(文政9年) 30歳

2月15日(1・9) 商館長ステュルレルに従い長崎を出発し、江戸に向かう。H.ビュルゲル・高良斎・二宮敬作・石井宗謙・湊長安・川原慶賀も同行する。出島一諫早。威福寺での別れの宴・日本の気候・長崎郊外の植物群・九州の温泉・一向宗の寺院。

2月16日(1・10) 諫早—大村—彼杵。緯度の測定・大村の真珠・大フキ・天然痘の隔離。

2月17日(1・11) 彼杵—嬉野—塚崎(武雄)。二ノ瀬のクスノキ・嬉野と塚崎の温泉視察・水分析。

2月18日(1・12) 塚崎—小田—佐賀。神崎小田の馬頭観音と梵字・佐賀についての記述。

2月19日(1・13) 神崎—山家。筑後川流域の農業・二度の収穫・ハゼノキと蠟燭・肥前の陶器・轟木で太陽高度測定・カワウソの発見・山家の鉱物コレクション・筑前藩主別荘での宿泊。

2月20日(1・14) 山家—木屋瀬。四季の植物群・キジ・ヤマドリ・クチレン病患者・内陸部高地の住民の顔立ち。

2月21日(1・15) 木屋瀬—小倉。石炭についての観察・ガン・カモ・ツルなど渡り鳥の捕獲・小倉藩侯の使者来訪〔阿蘭陀定宿は大坂屋善五郎の館〕。

2月22日(1・16) 小倉—下関。小倉の市場・海峡の深度などコンパスや深度測定の錘により観測・海峡渡航・与次兵衛瀬の記念碑・二人の市長。〔下関の阿蘭陀定宿は佐甲甚右衛門と伊藤奎之丞の館の内、シーボルト一行は佐甲家宿泊〕。

2月23日(1・17) 下関滞在。数人の門人来訪・カニの眼・ヘイケガニを入手・ホウキタケの記述。

2月24日(1・18) 下関滞在。クロノメーターで経度観測・太陽高度測定・早鞆岬と阿弥陀寺(現在の赤間神宮)・安徳天皇廟・伊藤奎之允の招待など。

2月25日(1・19) 下関滞在。クロノメーターで経度観測・太陽高度測定・日本人の知識・萩の富豪熊谷五右衛門義比・植物採集と海峡のコンパス測量・鉱物のコレクション調査。

2月26日(1・20) 下関滞在。クロノメーターで経度観測・門人知人の来訪・門人が論文を提出・病人の診療と手術。

2月27日(1・21) 下関滞在。近郊の散策・コンパスを使って測量・六連島・捕鯨についての記述。

2月28日(1・22) 下関滞在。参府用の船の設備検査・府中侯医官の訪問・『薬品応手録』進呈。

3月1日(1・23) 下関。門人知人と別れの挨拶と贈物受納と贈呈・太陽高度測定・正午過ぎ乗船。

3月2日(1・24) 下関出帆・正午ごろ太陽高度測定。

4月6日(2・29) 蒲原—沼津。岩淵村でクロノメーターによる経度観測・富士山の絶景を楽しむ・富士川を舟で渡る・富士山の高度を六分儀で測量・原の庄屋植松与右衛門の庭園を観賞(カンアオイ・センノウ・ユリ・ボタン・ヒメシャクナゲなど)。

4月10日(3・4) 川崎—江戸。数羽の黒ツル観察・礼装着用して出発・大森で薩摩・中津両侯出迎え・品川で桂川甫賢出迎え・江戸の商店・長崎奉行の代理の上席番所衆二人が宿舎に来訪〔阿蘭陀定宿は長崎屋源右衛門の館〕。

4月16日(3・10)江戸滞在。午前クロノメーターで経度観測・最上徳内が来訪し、エゾ・カラフトの地図を借用・同地方やアイヌの記述・銅の輸出査定・夜に将軍の侍医たち数名を食事に招く。

4月18日(3・12)江戸滞在。高橋作左衛門来訪。

5月1日(3・25)江戸滞在。江戸城へ登城・将軍に謁見・西の丸へ・老中や若年寄を訪礼・婦人たちの見物の的となる・日本の慣例により菓子を持ち帰る・激しい頭痛と胃の調子を悪くし、夜9時宿に帰りつく。

5月17日(4・11)江戸滞在。明日江戸出発と決まる。

7月7日(6・3)矢上一出島。正午同郷人に迎えられ出島に着く。

出島植物園内にケンペル Kämpfer とツェンペリー Thunberg 顕彰の記念碑を建立。

1827年(文政10年) 31歳

5月31日(5・6)其扇との間に女子(楠本イネ)生まれる。

9月10日(7・20)オランダ領東インド政庁がシーボルトをバタヴィアへ帰還させることを決定。

1828年(文政11年) 32歳

2月25日(1・11)出島にて、江戸の間宮林蔵宛の手紙を書く。

3月30日(2・15)シーボルトより高橋作左衛門景保宛手紙と間宮林蔵宛小包を長崎から発送。

5月11日(3・28)江戸の高橋景保宅に手紙が届く。高橋は同封の間宮宛の小包を届ける。間宮林蔵は決まりにより小包を幕府に届け、高橋の身边を中心に幕府の探索が始まる。

9月17日(8・9)夜半12時頃より翌朝5時ごろまで長崎地方は猛烈な暴風雨が来襲。出島植物園に植えられていた1,000種以上の植物は風と高波で損傷。

9月18日(8・10)出航予定の同船が台風で稲佐村の割石付近に座礁。船に積み込まれていたのはバラストとして最初に船底へと運び入れた銅500ピコルのみ。積み込む予定の荷物は、まだ出島の倉庫に保管。

11月19日(10・13)浅草の天文台下の高橋景保宅を捜査。ロシア提督・探検旅行家クルーゼンステルンの『世界周航記』4冊、同和解16冊、銅版和蘭地図12枚1冊を押収。

1829年(文政12年) 33歳

1月23日(12・18)幕府の命令で、シーボルト幽閉される。

3月20日(2・16)高橋作左衛門景保獄死。

10月22日(9・25)シーボルトに対して「日本御構」(国外追放、および再入国禁止)の判決が下る。このあと退去にそなえ、其扇(22歳)・お稲(2歳)母子の面倒を門人二宮敬作らに依頼するなど奔走する。

1830年(天保元年) 34歳

1月1日(12・7)シーボルトが小舟で小瀬戸に上陸し、妻子・門人らに別れを告げる。

日本で収集の文学的・民族学的コレクション 5,000 点以上のほか、哺乳動物標本 200・鳥類 900・魚類 750・爬虫類 170・無脊椎動物標本 5,000 以上・植物 2,000 種・植物標本 12,000 を持ち帰る。

7月7日 (5・17) オランダのフリッシンゲン港に帰港。

1832年 (天保3年) 36歳

月日付不詳、ライデンのラーペンブルフ Rapenburg19 番地の家を借用。「日本博物館」を開設し、コレクションの一般公開をする。

『日本』Nippon 第1分冊を出版。以後 1858～59年まで発行。

1833年 (天保4年) 37歳

『日本動物誌』Fauna Japonica 第1分冊を出版、以後 1850年まで発行。

『日本叢書』Bibliotheca Japonica 出版、以後 1841年まで全6冊発行。

1835年 (天保6年) 39歳

『日本植物誌』Flora Japonica 第1分冊を出版、以後 1870年まで発行。

1845年 (弘化2年) 49歳

7月10日 (6・6) ヘレーネ・フォン・ガーゲルンとベルリンで結婚。のちライデン付近のライデルドルプの邸宅〈ニッポン〉に住む。

1859年 (安政6年) 63歳

8月4日 (7・6) イギリス汽船イングランド号でオランダ通商会社顧問として、長崎港に入港 (30年ぶりの来日)。

8月6日 (7・8) 長男アレクサンダーを伴なって、出島の水門から上陸。商館長ドンケル・クルティウス宅へ。

1862年 (文久2年) 66歳

5月7日 (4・9) 長崎奉行高橋美作守がシーボルト宛に書簡を送る。また、オランダ通商会社駐日筆頭代理人 A.J.ボードウィンが出島から書簡と領収書を送る。夜 8 時、セント・ルイス号に乗船。長崎を離れる。

1866年 (慶応2年) 70歳

10月18日 (9・10) ミュンヘンで風邪をこじらせ敗血症を併発して死去。

10月21日 (9・13) ミュンヘンのタール教会通りの旧南墓地 (33 地区 13 列 5 号) に埋葬。砲兵第一連隊長ルドルフ・フォン・ウント・ツー・デル・タン大佐指揮下のバイエルン国軍一部隊が陸軍の荣誉礼をささげる。墓の上に中国のパゴダ形式の記念碑を建立。正面にルドルフ・シュヴァンターラーの塑像によるシーボルトの肖像レリーフが取り付けられる。